

中大生の旅するチカラ

3

◇学生時代の総決算

卒業旅行へGO!◇

学生時代のイベント総決算

卒業旅行を計画しよう

大学四年間のイベント総決算ともいえる卒業旅行。どこへ行くのか、そろそろバイトをしようか、

下調べや旅の準備を始める上級生の姿が目に見え、秋である。しかし近年は就活の時期も早まり、三年秋から企業をまわるのも当たり前だとか。早くに内定をもらった学生のなかには、卒業旅行と称して二度、三度、多い人では四回も国内外を旅した猛者もいて、隔世の感をもって卒業生の話に耳を傾けた。本誌学生記者の追い出しコンパでのひとコマである。

「卒業旅行の回数が二回以上という学生



学生時代の総決算・卒業旅行を自分らしくデザインしよう

が全体の六割を占める」とする調査結果を、ある旅行会社で聞いた。就活時期や経済情勢は変わっても、今の時代も卒業旅行が廃れていないことに安堵する。

かくいう筆者も卒業式前に欧州二週間と北海道



千葉 千枝子

Chiba Chieko

■ちば ちえこ 観光ジャーナリスト。東京成徳短大観光学講師。1988年中央大学経済学部卒、富士銀行入行。シティバンクを経てJTBに入社。96年有限会社設立。運輸・観光全般の執筆、講演活動を行う。All About 旅行チャンネル案内役。日本旅行作家協会、日本観光研究会等所属。著書に「JTB 旅をみがく現場力」(東洋経済新報社)など。

スキーマの、二つの卒業旅行を経験した。欧州への卒業旅行はパッケージツアーを利用したのだが、そのとき随行してくれた女性添乗員とは、その五年後、転職先の旅行会社で実施された新入社員向け欧州添乗研修旅行で奇しくも再会するというエピソードをもつ。添乗員のエキスパートとして先任役で現れた。そんな彼女に、欧州を再び引率してもらえたのは幸運としか言いようがない。

さらに驚いたことに後日談で、あの卒業旅行は初めての添乗業務だったと聞かされた。英語が達者で旅慣れた印象に、経験浅い学生の自分には想像もつかない。しかし彼女にすればドキドキの連続で、初添乗だけに記憶は鮮明とのこと。「確か銀行へ就職するって言っていたわよね」と、内定先まで覚えていてくれた。「旅は出会い」という

が、まさに卒業旅行に、赤い糸ともいえる出会いがあったので触れておく。

近年、若者の旅行離れが巷では問題視されている。特に若年層の海外旅行離れが著しい。しかし中大生には、大いに学生最後の旅を満喫してもらいたい。きっと、よい出会いがあるはずだ。

社会に出る前に海外を知ろう 卒業旅行の最近の傾向

例年、年が明けたころ、卒業旅行の人気先や予約動向を、旅行会社に取材する。ここ数年で卒業旅行商品は多様化し、日帰り旅から長期の欧州旅行まで選択肢も豊富になった。しかも学生最後の一大イベントとして、卒業旅行は低年齢化の傾向にある。東京デイズニールゾートや富士急ハイランドなどへは小学六年生からも申し込みがあると聞き、節目を祝うセレモニーと化しているのがうかがえる。

海外でなく国内旅行を選ぶ大学生も少なくない。ある大手旅行会社の担当者は、従来、北海道・沖縄だけだった卒業旅行商品を、京都も加えて売り出すようになったと語る。「海外ではなく国内」という選択は、近年の特徴らしい。その理由に「親が海外旅行を許してくれないから」と語る学生が増えていると担当者。「可愛い子には旅をさせよ」



JTB東日本営業本部が実施した欧州添乗研修で5年ぶりに再会した西垣カズ子さん（右）（1993年2月）。卒業旅行の添乗員として随行されたのが出会い

という格言も、少子化の波で変化しているのだから。また、「グループで卒業旅行を計画するさい、経済的事情をもつ学生にあわせて目的地を変更することも珍しくない（旅行会社の担当者）」という海外で、共に思い出をつくらうとする現代学生の姿は、昔みたハングリー精神からくる海外志向と

は少しばかり違って映るが、「自分だけがよければいい」という風潮のなか、ほっとさせる話題だ。社会の荒波に採まれる前のピュアな心で、世界を見聞することには大きな意義がある。国内旅行にもアドバンテージはあるが、自由時間のある今、海外を目指してほしいと筆者は願っている。

人気はアジアと欧州 ビーチリゾートも

海外卒業旅行は、アジアと欧州が人気を二分する。

アジアの場合、旅行費用を安く抑えることができ、かつエネルギーで躍動感が得られるのが魅力らしい。経済発展著しいアジア諸国をまわることで、社会に出てから知識や経験のうえで役立つことも多かる。歴史ある欧州へは誰もが一度憧れる。時間に余裕がなければ行くことのできないロング・デイスティネーションで、成熟国家の歩むべき姿をきくと読み取ることができるだろう。グループでビーチリゾートへ行く学生も多い。グアムやハワイ（米国）、バリ島（インドネシア）やプーケット（タイ）などに人気が集まる。ホテルもよいが、キッチン付きのコンドミニウムやヴィラに泊まって、ワイワイやるのも楽しいだろう。

米国本土やカナダ、オーストラリアへ向かうものも少なくないが、アジア・欧州人気に比べると今一つのように、世界経済の趨勢や歴史、伝統文化の魅力が旅行目的地に反映しているのがよくわかる。

欧州への卒業旅行はパッケージツアーが主流だ。バスで複数都市を周遊するようなコースの場合、旅が終わるころには他大生とも旧知の仲のように親しくなり、泣いて別れを惜しむと聞く。社会へ出る前に団体旅行をすることで、集団行動の予行演習ができる点もよい。

時代ごとに変化する卒業旅行 ヒッピーからバブルを経て今

大学生が卒業を目前に旅する「卒業旅行」という言葉が一般的に用いられるようになったのは、80年代のことである。バブル経済を背景に、海外は学生分にも身近な存在となった。フランス・パリの一流ブランド本店で開店前に列をなす日本人学生の姿も珍しくない時代。その多くは卒業旅行と銘



バンコク・バックパッカーの宿「スク11」の壁には日本語の落書きも

打ったパッケージツアーの参加者たちだった。しかし、さらにさかのぼるとヒッピーと呼ばれる若者が増えた70年代のはじめ、絶対多数ではないが海外を放浪する学生が現れ始めていた。ジャンボジェット機が就航し大量輸送時代が幕開けた70年代以降の学生たちは、安い航空券を入手して、バックパッカーで旅するのが常道だった。



旅行会社各社ともシーズン前倒しで卒業旅行商品を取りそろえる

バックパックと呼ばれる大きなザックにTシャツとジーンズ、寝袋にパーコレーター（簡易湯沸かし器）を詰め込み、パスポートと地図、幾ばくかのバイトで貯めたお金を手に安宿を泊まり歩く。ガイドブックはポロポロになるまで読みつぶされ、日本の友へエメール（絵葉書）は欠かさない。無精髭をはやし、無事、帰国すれば英雄扱いというのが、当時の学生バックパッカーの姿であった。しかし近年、バックパックで世界を旅する日本の若者が減少傾向にあると聞く。

バックパッカーの聖地バンコク
気づかされた若者の特権

“バックパッカーの聖地”と呼ばれるバンコク

の、スクンビット地区にある専門宿「スク・イレブン」には幾歳月、ここを訪ねた若者たちの足跡を示す無数の落書きが目に残る。そのパッ

クパッカーたちの日本語バイブルといえ、地球の歩き方」(ダイヤモンド・ビッグ社)だろう。海外旅行のガイドブックで圧倒的なシェアを誇る。この「地球の歩き方」を創刊(79年)



タイ国政府観光庁創設50周年記念式典でダイヤモンド・ビッグ社の西川敏晴会長と(2010年3月)

したメンバーのおひとり西川敏晴さんと、今年の春、バンコク取材を一緒にした。タイ国政府観光庁の創設50周年式典参加が大きな目的だったが、多忙ななか市内の視察にも同行され、説明に静かに耳を傾けた。その折り、「千葉さん、バックパッカーは今や死語ですかね」と、多少自嘲気味に意見を求められた。そう尋ねる西川さんこそ、言わずと知れた元祖バックパッカーだ。ご自身の学生時代の経験をもとに、海外の個人旅行に欠かすことのできない詳細な日本語ガイドブックを世に出した産みの親として、業界内で知らない人はいない。確かに取材先でも、「バックパッカーは少数派」と聞いていたから、返答に迷った。

重い荷物を背負い、ガイドブックを片手にローカルバスや列車を乗り継ぐ旅スタイルは、一見、貧乏旅行をイメージさせる。だがバックパッカーの旅

は、時間と体力がある若者の特権のものでもない。つい先日、世界遺産・白川郷を訪ねる途上、飛騨高山(岐阜)の街かどで多くのバックパッカーとすれ違った。おもに欧米豪からの若者だ。対象的にアジアからの渡航者は、かつての日本人のように皆、ブランドものを身につけていて面白い。世界の若者がどういった旅姿をしているのかを考えるよい機会となった。

日本の将来を考えれば、バックパッカーが死語となってはならない。ましてや就職氷河期だからと海外旅行を敬遠する学生や親が増えるとしたら、なおも日本は縮んだ社会に陥るだろう。成熟国家と、発展途上でキャッチアップのころにある各国の若者の違いは、旅姿に如実に表れているが、果たして日本はどちらにもなりきれないであろう。バックパッカーではないがパッケージでもない、個人旅行というスタイルでスーツケース片手に旅立つのもよいではないか。自分らしさで旅のスタイルを選ぶことができる、豊かな時代ととらえたい。

最後に海外卒業旅行の注意点を三点。(1)滞在先や旅程を家族に伝えてから旅立つ、(2)海外旅行保険にケチらず入る、(3)危険なエリアに興味本位で立ち入らない。これらを守って、学生総決算を美しく飾ってほしい。